

サトウキビ栽培と島の暮らし

玉 城 善 哲*

Sugar Cane Cultivation and Life on Kohamajima Island

Yoshitetsu TAMAKI*

はじめに

小浜島には、小浜節で名高い海拔99.4mのウフダキ（大岳）があり、起伏に富んだ地形をしている。ウフダキ頂上からの眺望は、風光明媚で、晴れた日には与那国を除く八重山群島の島々を一望に見渡すことができる。

島は、畑地や水田はもとより保安林、竹林、草地からなり、「小浜節」に「小浜ている島や 果報ぬ島やりば」の歌詞があるように、昔から自給自足のできる果報の島と語られてきた。総世帯数は277世帯（字小浜253世帯、字細崎24世帯）、人口は546人（男275人、女271人）（平成15年12月現在）、農家戸数は約80戸～90戸で推移している。

農業は、さとうきびを中心に畜産（和牛の子牛生産）との2本柱からなっている。農地の基盤整備も、昭和51年に竹富町最初の土地改良事業がスタートし、小浜島のテナ原地区（42ha）が実施され、以後、ミニ総合パイロット事業（38ha）や大岳地区土地改良事業（97ha）等で合計177haの農地整備がされ、さとうきび栽培を中心にした計画的な土地利用が推進されている。また、近年、ふるさとUターン組の若年層による畜産農家が増え、島の丘陵地を利用した和牛の放牧も盛んになり、畜産が急激に伸びてきた。

漁業は、クマンザキ（細崎）集落（24世帯67人：男35人、女32人）で営まれ、近海漁業での刺し網漁、

栽培漁業（モズク、貝類）、稚魚の放流事業等が主に営まれている。一方観光事業は、ヤマハのリゾートホテルはいむるぶし（南十字星の意）の長期滞在型宿泊施設やユニマットグループゴルフ場ハイムルミラージュカントリークラブ、マリンレジャー（観光ダイビング・シュノーケリングなど）の盛況により観光客も年々増加している。また、NHKによる朝のドラマ「ちゅらさん」の放映により、小浜島が全国へ大々的に紹介され、観光入域客数も急激に増えてきた。さらに、夏場になると、小浜島の北の海上に浮かぶ無人島の嘉屋真島は、リゾートアイランドカヤマとして、海水浴やキャンプ場、野生化したウサギとのふれあい等、修学旅行や一般旅行者の人気スポットになっている。リゾートブームの波に乗って島のくらしが変容していくことに対する島の中の評価は賛否両論である。島の地形や景観が著しく変貌し続ける小さな島に生息している動植物の生態系や自然環境の破壊が危惧されることは述べるまでもないであろう。

この報告書は、「サトウキビ栽培と島のくらし」という視点から調査し、島嶼のくらしの一考察であることと、十分な聞き取りができなかったことをあらかじめお断りしておく。

小浜島の位置と地形

小浜島は、行政区が八重山郡竹富町に属し、石垣

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

島より南西に17.7 km、西表島の東約2.5 km離れた位置にあり（図1）、周囲は13.49 km、面積が814 haある。竹富町を構成する島嶼には、沖縄県第二の大きさを誇る西表島をはじめ、波照間島、黒島、小浜島、竹富島、新城上地島、新城下地島、鳩間島、由布島、外離島、内離島、中御神島、嘉弥真島などがある。その中でも小浜島は海岸線が複雑で地形も起伏に富んでいる。地形的に観ると、島の中央部にある大岳をのせるドーム状丘陵の部分と、その南東の標高32.6mを最高とする丘陵と島の南西に位置する標高34mを最高とする丘陵との三つの部分に分けることができる。これらの丘陵のいずれもが周縁部で傾斜を急にしている。特に、大岳をのせる丘陵の北側の斜面は急な傾斜で海に臨んでいる。地質的には、島の中央部の安山岩と東部の砂岩などが基盤をなし、北部の海岸と東部及び南部の海岸付近は、隆起サンゴ礁の琉球石灰岩で形成されている。

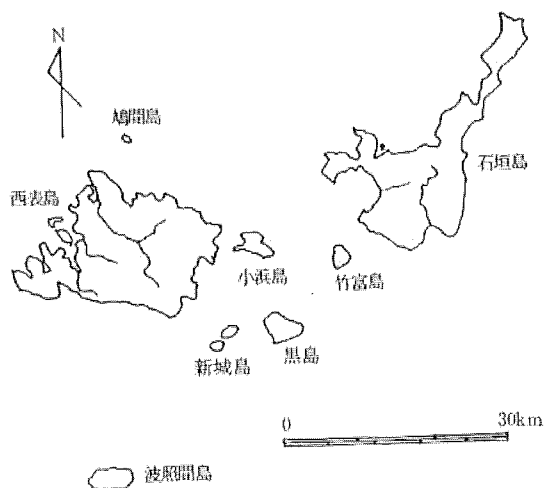


図1 小浜島位置図

小浜島の自然環境

八重山諸島は、気候的には亜熱帯海洋性気候にあって、年平均気温は約23.3度と比較的暖かく、最低気温でも10度を下る日はきわめて少ない。年間の降雨量は2,600mmで、7月から9月にかけて年間約3～4個ほどの台風が接近し、集中的に降雨をもたらす（表1）。部落の集落地では、台風による塩害や風よけとしての防風林が見られる他に琉球石灰岩の石垣やヒンプンも見ることができる。

表1 小浜島に近い竹富島の月平均気温と降水量
平成11年度版「竹富島の概要」（西表島測候所）

月	1	2	3	4
平均気温（℃）	17,6	18,1	19,8	22,6
降水量（mm）	172,3	161,4	153,2	163,6

月	5	6	7	8
平均気温（℃）	25,2	27,2	28,4	27,0
降水量（mm）	210,6	196,1	193,2	244,4

月	9	10	11	12
平均気温（℃）	27,0	24,9	22,1	19,1
降水量（mm）	248,1	222,8	224,1	152,9

小浜島の土壌

小浜島の土壌は、90%以上が国頭マージで占められており、大岳周辺と北側丘陵地、島の南東部に位置するヤマハリゾート「はいむるぶし」周辺からシュガーロード（「ちゅらさん」の通学路）周辺と島の南西部の丘陵地が国頭マージの土壌（黒塗り部分）である。島尻マージは、県道210号小浜線の通る字小浜の集落を中心にその周辺に広がっている。カニク（海成沖積土壌）の土壌は、東部と南部の海岸線付近と大岳北側の三カ所に散在している（図2）。

国頭マージ土壌

この土壌は、土色が赤黄色系で有機質に乏しく、土壌流亡を生じやすい性質のある酸性土壌である。土壌に酸性の度合いが強くなると根の働きを直接妨げて養分の吸収を悪くし、作物に害をあたえる。この土壌は酸性土壌であるため、パイナップルや茶樹、果樹などの好酸性作物の栽培には適しているが、サトウキビの栽培も盛んである。一般的に地力が低く、施肥量を減ざると作物の生育に大きく影響する。

島尻マージ土壌（隆起サンゴ礁石灰岩土壌）

この土壌は、土色が赤黄色系統で中性ないしアルカリ性を呈し、珊瑚石灰岩が風化してできた土壌である。この基岩になっている石灰岩は、土層の層厚の変化も大きく、場所によっては基岩が地表近くまで露出しているところも見られる。構造上保水力が

小さいだけでなく、根の伸長を阻害されたり、干ばつの被害を受けたりすることが多く、農作物の生産を安定させるには、土層の薄い場所には客土したり、かんがい用水を施したりする必要がある。土壌の色ではやや国頭マーゼと似ているが、肥沃度や肥料分を保持する能力（保肥力）においては島尻マーゼが優っている。栽培される作物はサトウキビを主体にしてイモ類、野菜類が多い。

カニク

海岸に面した沖積地にみられる砂質土の土壌で、沖縄ではカニクと呼んでいる。アルカリ性を呈する

が養分含量が少なく、海岸地帯のカニク畑で生育している株だしサトウキビに養分欠乏が生じる場合がある。一昔前の小浜島では、カニクの利点である保肥力を生かして水稻栽培が盛んに行われていた。

小浜島のサトウキビ栽培

小浜島の農業変遷を大別すると、第二次世界大戦前の農業、大戦後の農業、本土復帰後の農業に分けることができる。

戦前の島における農業は、主に水稻、さつまいも、麦類、豆類等の食料農作物を中心に、サトウキビの

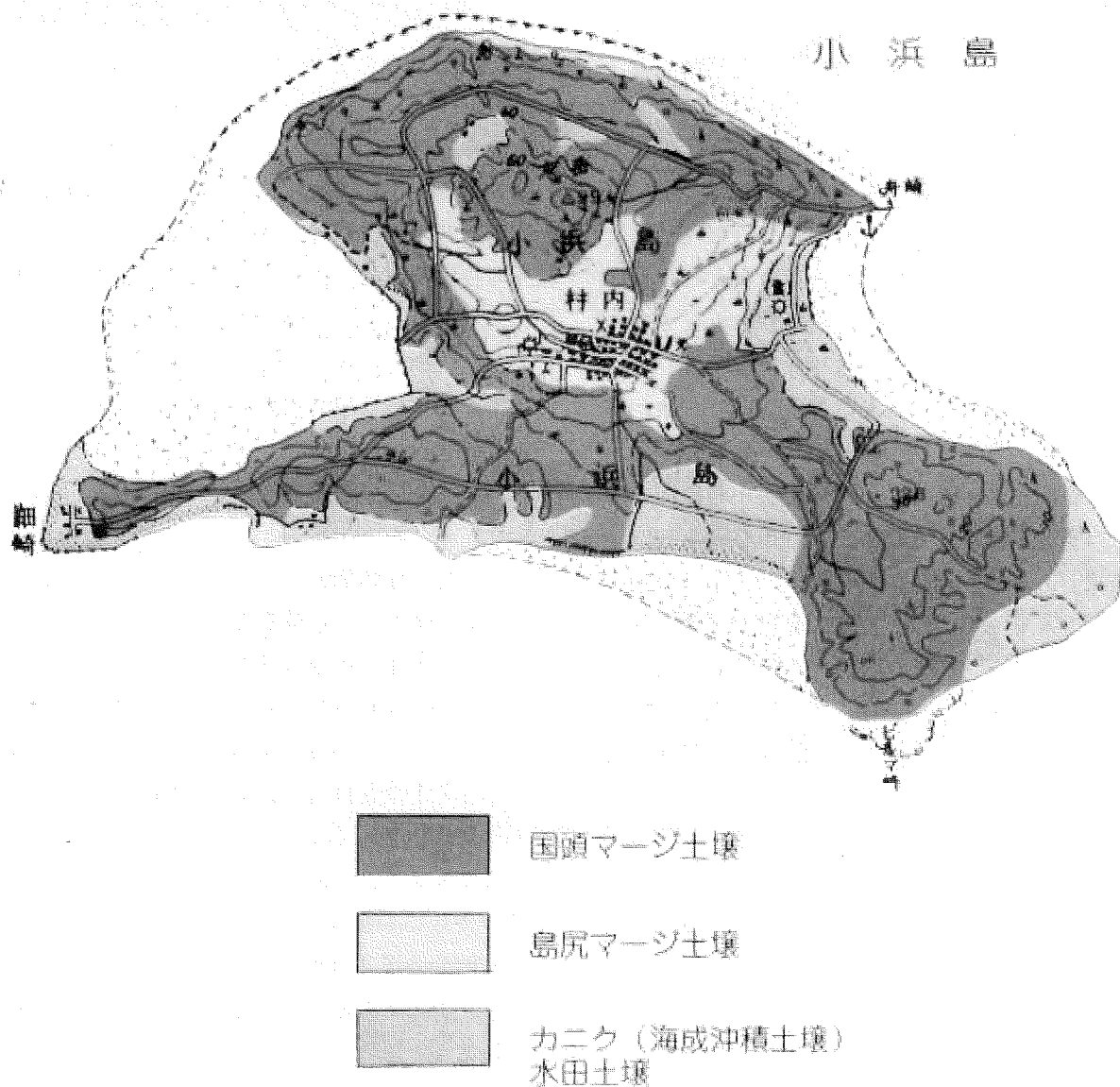


図2 小浜島の土壌分布

生産が行われ、多種多様な作物が栽培されていた。

戦後（1950年代）になると、価格の安い海外からの食料農産物の輸入などの影響を受けて穀物生産が激減し、サトウキビやパインナップルの原料農作物が普及した。

本土復帰後は、農道の整備やかんがい施設、農用地開発などの公共事業が推進された。土地改良事業では、1期目に島の南西に位置する丘陵地（通称：テンナバル）、2期目に南東に位置する丘陵地（通称：ハインダバル＜南風田原＞）、3期目に大岳周辺丘陵地（通称：コーキバル）が整備された。

糖業

明治14年（1881）沖縄県庁よりサトウキビの苗3株が八重山地域（石垣島）に移入され、大正時代になって、そのサトウキビの苗（読谷山種）を、小浜島に移入栽培し、増殖普及したのが小浜島での糖業の始まりである。昭和5年（1930）には沖縄県の奨励品種の大茎種が優良種として普及し、栽培面積も増大していった。小浜島は、昭和5年～9年にかけて、動力圧搾製糖工場が施設され、これと平行して改良窯が考案されるのに伴い、糖業は軌道に乗り、生産高も増加し、安定した唯一の換金作物として農業経営の基盤をなすに至った。太平洋戦争中は、食糧作物増産のためにサトウキビ栽培は減産し、殆ど糖業は全滅寸前の状態であった。戦後、島における食糧事情の好転に伴い、換金作物の復興が叫ばれ、サトウキビ苗の増殖生産と島外からの苗移入などに努めた結果、サトウキビは大幅に増産し、小型の動力製糖工場が施設され、小浜島での糖業が再会される運びとなった。その後、昭和37年（1962）、大洋漁業（株）が島にある小型製糖工場を買い上げて50t工場を創立し、昭和47年（1972）までに11期操業するが、経営困難を理由に昭和48年（1973）に解散する運びとなった。島での製糖工場が廃止になると、サトウキビ栽培で生計を立てている栽培農家の死活問題ともなり、対策を協議した結果、小浜島で工場を買い取ることが決議され、竹富町当局からの補助金1,500万円を受けて、昭和49年（1974）2月、照島糖業株式会社（資本金500万）が設立された。操業開始当初の48年・49年期は、原料不足のために片番操業という変則的な操業を続けながら原料増

産を図り、49・50年期からは正常に操業できるまでとなった。工場設備の老朽化もあるが、設備改善の工事を年次的に実施しながら、昭和63年（1988）9月、照島糖業株式会社から小浜糖業株式会社（資本金4,957万円）（写真1）に社名変更をして現在に至っている。

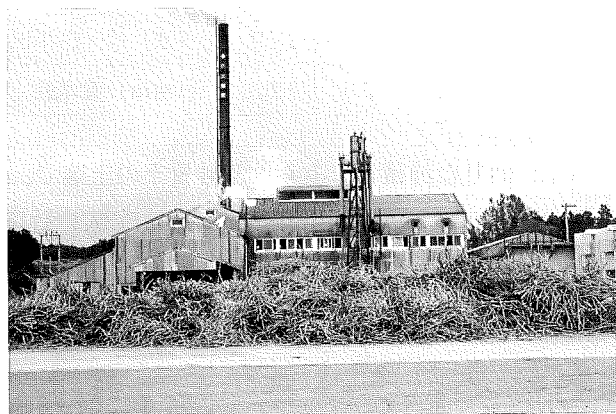


写真1 小浜糖業全景

サトウキビ栽培

サトウキビは、根で吸収した養水分と葉で光合成した炭水化物を使って、成長しながら糖分を茎に蓄積する作物である。従って、収量と品質は、根と葉の多少や活力によって決まることになる。

1) 耕起及び整地

耕起と整地は根の活力を高めるための作業である。耕起は、パワーショベル（写真2）やトラクター等で行い、耕土の深さは、40cm～80cmを目度に留意しながら行う。耕土した土壌は破碎し、土壌を保全する面から承水路を設ける等の排水対策も肝心である。小浜島の国頭マージは、酸性土壌である。土壌の酸性、アルカリ性の強さや反応を表すのにpH（ペーハー）を用いる。pHの目盛りは0～14まであり、7を中性として、数字が小さくなると酸性度合がだんだん強くなり、逆に7から数字が大きくなるにしたがってアルカリ性の度合がだんだん強くなることを表す。土壌は、雨期が長くなると酸性化していく。これは、土壌の表面部分の塩基（カルシウムイオン、マグネシウムイオン等）が雨で洗い流されて水素イオンに置き換えられるためである。土壌が酸性化すると根の働きを直接妨げて養分の吸収を悪くし、作物に害をあたえる。小浜島では酸性土壌が多く、耕起

時に堆きゅう肥を施用したり前作に緑肥作物を栽培するなど、土壌pH5、5～6.5程度をめやすにして有機物の補給に努めることが単収増加につながると思われる。



写真2 耕起用パワーショベル

2) 畝立てと植え付け

畝立て作業（植溝掘り）と植え付けの作業は、以前はスコップを使って、畝幅をスコップの長さ（約1m）に採り、人力で植溝を掘り、採苗をした後に植え付けと踏み付けをする工程での人力による重労働の作業であった。現在では、畝立てと植え付け・踏み付けの作業工程を二通りの方法で行っている。ひとつは、中型トラクター（通称：ブルトラ）に運転手（オペレーター）の他に一人の植え付け作業員が乗り込み、畝立てをしながら、カゴに準備されたサトウキビの苗（短茎でチョッピングされている。）を畝に落としていく方法である。作業は、畝立てと植え付けを同時に行い、覆土と踏み付けは植え付け完了後人力で施している。もう一つの方法は、大型トラクターにオペレーターと植え付け作業員が乗り込み、大型トラクターのプランターにセットされた長茎のサトウキビをカットしながら畝に落とし、同時に覆土と踏み付けを実施して植え付け作業の工程を進めていく方法である。トラクターによる畝幅は約145cm、植溝の深さは約25cmである（写真3）。現在ではサトウキビ栽培農家の80%が機械化による畝立て・植え付けの同時作業を取り入れている。

小浜島で栽培されているサトウキビは、沖縄県で1994年に奨励品種となった農林8号が多い。農

林8号は、早期高糖性品種で耐風性の高い品種であるが、株出しでの茎の揃いが多少低くなる。島の南東部に位置するハインダバル（南風田原）のカニク地は、砂質土で水田土壌の肥沃地であり、農林8号の栽培には適しており、茎の伸長が早く、梢頭部まで2.5m～3mもある長茎のサトウキビを観察することができた。



写真3 植え付け後のサトウキビ畑

3) 植え付け時期

サトウキビの植え付け時期には春植えと夏植えがある。春植えは、サトウキビの刈り取り作業と併行しながら、株の切り替え地を耕起し、2月上旬頃から3月下旬頃までに植え付けを終了する。夏植えは、4月から6月にかけて作付け地の耕起と整地をして乾燥させた後、8月上旬頃から9月下旬頃までに植え付けをする。島におけるサトウキビの栽培型は、夏植えと株出しが殆どで、春植えは僅かである（表2）。

4) 施肥

サトウキビ栽培には、葉や茎の生育を促進したり、根や茎を丈夫にして、暑さや寒さに対する耐候性、病害虫に対する抵抗性を高めるためにチッソ（N）、リンサン（P）、カリウム（K）の化学肥料が多く使用される。国頭マージ（酸性土壌）では、地力を高め、作物の生育バランスを保つために、島尻マージやジャーガル土壌よりも化学肥料の施肥量が多くなる。ジャーガル土壌の夏植えと株出しの施肥量を面積あたりで比べてみると、チッソで約1.3～1.5倍、リンサンで約2.5倍、カ

表2 45/53年期作型別植付面積 単位 (ha)

	夏植え	春植え	株出し
45/46年期	49,2	1,8	45,5
46/47年期	30	0	24
47/48年期	47,9	0,2	9,3
48/49年期	21	0	7
49/50年期	20	0	15
50/51年期	35	0	16
51/52年期	55	0	28
52/53年期	49	0	19

リウムで約3.5倍も多く使用している。サトウキビ栽培で化学肥料だけを使用すると、地力がさらに低くなり、収量や品質にも大きな影響がでてくるのは言うまでもない。サトウキビは生育期間が長いので、国頭マージ土壤の地力を高めるためには、堆きゅう肥、緑肥等を増肥し、土壤中の腐食を多くして土の構造や性質を生産性の高い土壤に変えていくことが重要である。腐植は植物の遺体（根、茎、葉など）を腐らすのに役立つ土中の微生物の死体がもとになっている。堆きゅう肥や緑肥を土に施すことによって、土と土の結びつきが大きくなり、空気や水の通りも良くなるので作物根の伸長が促進される。また、多くの雨が降っても、土のすき間を通して過剰な水が地下へ流れていき、土壌流出等の湿害を受けることも少なくなる。特に国頭マージ（酸性土壤）の多い小浜島では、農作地での活力を高め、生産性を向上させる

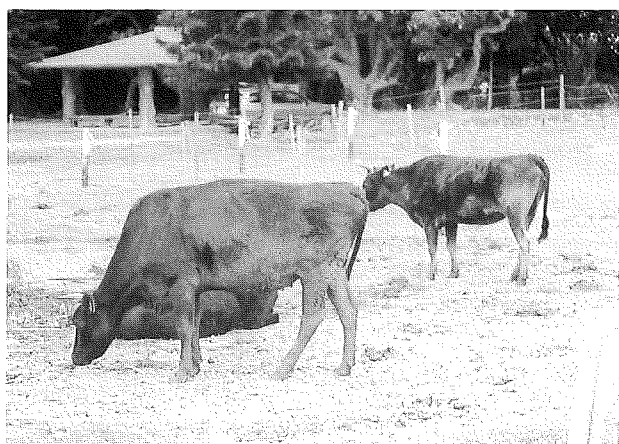


写真4 放牧地での和牛

ためには、畜産（写真4）によって生まれる堆肥の利用や緑肥作物の計画的な輪作等が重要になると思われる。

5) 培土

培土には平均培土と高培土がある。培土の時期としては、夏植えの場合、平均培土が10～11月、高培土が2～4月に施される。培土は、サトウキビが倒伏するのを防止するためと茎や根の活力を高めるために行われる作業である。培土が早すぎたり、遅すぎたり、干ばつ時に作業したりすると、茎や根に損傷を与えて生育を抑制する場合があるので十分な注意を払う必要がある。

培土作業は、主に、小型のトラクター（24馬力未満）で行われる（写真5）。小浜島にはトラクターが約31台あり、27台が小型トラクター（通称：ブルトラ）である（平成15年度竹富町役場調査）。字小浜は、小型トラクターの個人所有率が高く、培土作業も個人で行っているところが多い。また、最近では、島でサトウキビ栽培に従事している農家（85戸）の高齢化もあり、作付け地の耕起から植え付け、肥培管理、収穫作業までの一切を農業生産法人小浜島ファームに委託する農家も増えつつある。



写真5 小型トラクターによる高培土

6) 除草

雑草は、養水分を吸収するだけでなく、日光を遮断し、サトウキビの分けつ茎の発生を抑制して茎数を減少させるとともに減収をもたらす。小浜サトウキビ栽培地では、雑草を押さえる工夫とし



写真6 夏植え後の間作

て、夏植え後に畝間を利用した作物栽培（間作）を見ることができる（写真6）。

サトウキビの収穫

サトウキビは、上、中、下部節位のブリックス差が最も小さくなったときに収穫する。未熟の蔗茎は、下部節位のブリックスが上部節位より高く、過熟茎は逆に、上位節位が下部節位よりも高くなる。従って、刈り取り作業は、品質の高いほ場から計画的に収穫し、刈り取ったサトウキビは直ちに工場へ搬出して鮮度の保持に努めることが良質の黒糖づくりにつながる。

1) サトウキビ生産高の推移

小浜糖業（株）における、昭和50/51年期から平成13/14年期までの原料処理量は、約130,615吨で、年期平均は、約4,838吨である（小浜糖業資料参照）。そして、サトウキビ生産農家一戸当たりの生産高平均は、約55～60吨で推移している。サトウキビの植え付け作業、肥培管理、収穫作業等の重労働量、農業従事者の高齢化から考えると、一戸当たりの生産高の数字の高さには驚きである。

2) 刈り取り作業

製糖期の小浜島は、活気に満ちあふれている。製糖期の島は、昔懐かしいムチャの臭いが漂って、心癒される思いがする。筆者の出身地が、当時、沖縄本島でも有数なサトウキビ生産地であった旧三和村である。部落にはサーターヤーがあり、製糖期になると学校帰りにサーターヤーに立ち寄

り、知恵を絞りながらシーザー（黒糖づくりの熟練職人）からムチャを頂いたものである。

小浜島では製糖期になると、サトウキビ畑で刈り取り作業に精出す小集団のグループを見かけることが多い。キビ刈り作業をしている若年層の小集団グループのほとんどが、県外出身者で構成されている（写真7）。



写真7 キビ刈り作業中の若者

地元沖縄の若者が重労働となるサトウキビの刈り取り作業を敬遠する中で、黙々と作業している姿を見ていると、現代社会の様々な状況が頭の中をよぎっていくのを感じた。県外の若者達が季節労働者となり、製糖期の小浜島でキビ刈り作業要員として働く仕組みや方法について調査してみると、4通りあることがわかった。

- ①職業安定所の紹介による小浜糖業での賃金労働
- ②農業生産法人小浜島ファームでの賃金労働
- ③キビ栽培農家の直接雇用による賃金労働
- ④宿泊無料、食事付きの民宿、「ふるさと農場倶楽部」（通称：援農隊）での無賃労働

小浜島ではサトウキビの刈り取り作業に収穫機を導入していない。収穫機（ハーベスタ等）を導入しない大きな理由に、製糖工場の原料処理能力（1日50吨）と工場設備の老朽化が揚げられる。それとともに、新鮮な原料によって生まれてくる品質の高い黒糖を製品化する過程（写真8、9）でのバランスが考えられていると思われた。

小浜島でのキビ刈り作業は、手斧でサトウキビ



写真8 小浜糖業での黒糖の袋づめ作業



写真10 サトウキビを運ぶトラクター



写真9 小浜糖業（株）の小浜島名産黒糖

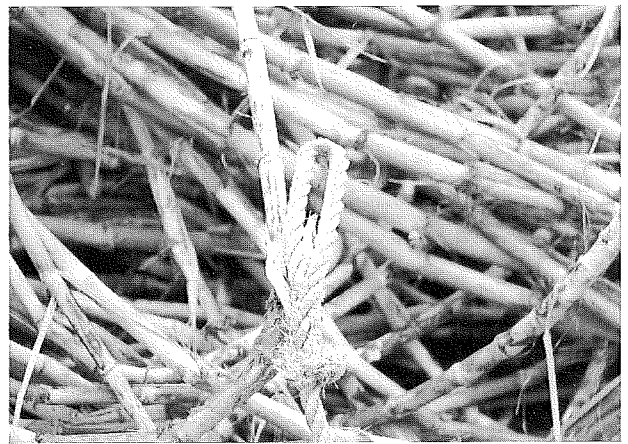


写真11 サトウキビの下に敷かれたロープ

を倒した後、鎌を使って梢頭部を切り落とし、枯れ葉を取り除きながらサトウキビ畑の中にひと山ずつ置いていく。一束ずつ束ねる作業は一切しない。一本一本積み重ねてひと山（約500kg）になったサトウキビは、道路近くの畑内に敷かれたロープの上に中型のトラクター（通称：ブルトラ）で運んでいき、製糖工場まで運搬する大型トラックに作業を引き継いでいく（写真10、11）。

3) サトウキビの運搬

サトウキビは、大型トラックに装備されたユニットで吊り上げて荷台に載せられ、製糖工場まで運ばれていく（写真12、13）。サトウキビの積み込み作業は、大型トラックの運転手（オペレーター）と助手が一緒になって行うことが多い。製糖工場に運ばれてきたサトウキビは計量され（写真14）、ブリックス検査を受けて、製糖工場構内のサトウキビ置き場の作業員によって手際よく搬入順にま

とめられていく。

4) 畑小屋

小浜島では以前より少なくなったが、畑小屋を見かける（写真15、16）。畑小屋のことを小浜では、ハタキヤーと言っている。ハタキヤーが現在も存在していることは、稲作が盛んだった頃の名残である。細崎で見かけることはできなかったが、小浜では大岳周辺と島の南東部で見ることができた。1953年7月8日発行の八重山毎日新聞の紙面に小浜島生態紀（上）の記事がある。新聞記事によると、「特産物はやはり米。一期、二期米で年間六十万斤を収穫する。田圃は120町歩で主として天水田で……」とある。面積約119ヘクタールで約360屯（一斤は約600g）の米を収穫していたことになる。米の一俵が約60kgなので、約6,000俵になる。ところが、昭和38年（1963）の大干ばつ以来、サトウキビ増産ムードに後押し



写真12 積み荷作業する大型トラック



写真15 水田の畑小屋



写真13 サトウキビ満載の大型トラック



写真16 サトウキビ畑の畑小屋

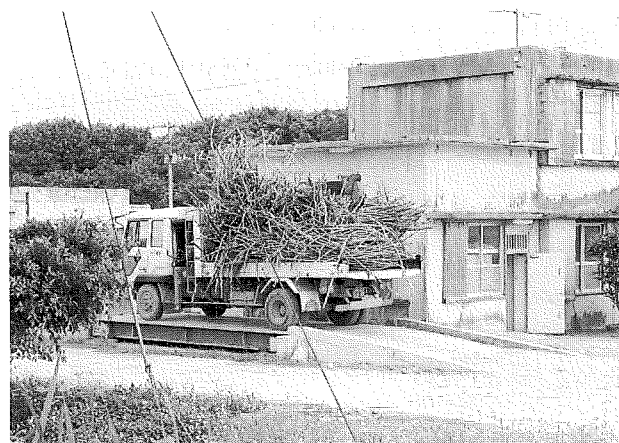


写真14 サトウキビ計量中の様子

されながら水田地帯が畑地に転換されることが多くなり、さらに安価で良質の外来米への依存度の高まりとサトウキビ栽培との労働面の競合等で稲作面積が年々減少していった。食糧不足対策の一環として稲作生産が拡大していた頃（昭和30年代）は、ハタキヤーが多かったという。その頃のハタ

キヤーは、労働の疲れを癒すための一時的な休憩所となったり、炊飯や食事をする場所になったり、農具置き場、収穫後の作物を一時的に収納する場所となったり、多目的に使用されていたこのことである。

黒糖づくり

小浜糖業の前身である大洋漁業（株）が糖業開始をする以前の小浜島には、小浜集落を取り囲むように中型の15屯工場が集落の周辺に3カ所あった。小浜小中学校の北側にある「かぶにわんお嶽」を挟んで東側に東工場、西側に中工場、そして小浜集落の西側には西工場があった。当時、東工場で黒糖づくりの仕事をしていた前仲氏（現在76歳）に当時の様子を聞くことができた。前仲氏によると、自家発電の圧搾機で搾られた蔗汁は、五つの平ナベ（約180cm×180cm）を使って黒糖づくりをしていた。熟

練された黒糖づくりの職人によって、最初の一番ナベでアク取り作業が行われ、二番ナベ、三番ナベ、四番ナベで濃縮ながら石灰を投入し、最後の五番ナベで仕上げていく作業工程で黒糖が作られていった。生まれた黒糖は、樽（120斤：約72kg）に入れられて石垣島経由で沖縄本島に出荷していたとのことである。現在も黒糖づくりの作業行程においては、機械化はされているが、大きな違いはない。サトウキビ栽培農家や工場スタッフの温かい心によってつくられた小浜の黒糖は味・品質ともに評判が高い。

考 察

小浜島は、恵まれた大自然の豊かな環境に包み込まれている。島の中は勿論のこと、島の周辺も含めて、自然がつくりあげてきた宝物がいっぱいあった。正直なところ、たった4日間の調査で、「サトウキビ栽培と島の暮らし」を論述することは心忍びない思いである。今回の調査は、調査の不十分さと筆者の力量不足で満足できる調査が出来ず、現況報告になってしまった。2度の調査で印象深いのは、島の若い人に人気のある畜産業の広がりやサトウキビ栽培農家の高齢化である。島の活力は、豊かな自然が築きあげたエネルギーの中から生まれてくるものと、筆者は思っている。小浜節は八重山地方だけでなく、沖縄本島でもよく知られた歌である。全体的にミルク世界報の島を表現した歌である。「大岳バ後（クシャ）ティ、白浜前ナシ」の句にみられる白浜の浜

も護岸工事ですっかり変貌している。小浜島には自然がつくりあげてきた小浜島だけの豊かな環境がある。筆者の考えている豊かな自然とは、水や空気であり、地形や地質であり、地形や地質が基になってできた土壌であり、島で生活する動植物すべてである。島の先人達が築いてきた、自然を基にした生活の知恵を土台にして、他の島々にはない、小浜島だけの島しょ観から生まれるべきサトウキビ栽培と島のくらしを望みたい。

謝 辞

本調査については、金城聖吉（小浜糖業社長）・白保永太郎（小浜糖業常務）・慶田盛正光（小浜民俗資料館館長）・黒島精耕（竹富町教育委員会教育長）・花城栄行（竹富町文化財保護審議会会長）・前本幸一・前仲信英・根原清一の各氏に様々な情報をいただいた。厚くお礼申し上げます。

文 献

- 八重山農業改良普及所. 1981. 『八重山の土壌』
- 八重山農林土木事務所. 1996. 『八重山農漁業基盤整備—島々の美しき世界報村づくり—』
- 竹富町役場. 1978. 町制30年のあゆみ.
- 記念誌委員会（編）. 1997. 『創立100周年記念誌『うふたき』竹富町立 小浜小学校.